

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 41 回 第 10.1.13 節～第 10.2.2 節

2019 年 9 月 1 日

小 田 勝

284 頁「10.1.13 難易文」から。中古における「…がたし」は動作・行為の実現が不可能に近いことを、「…にくし」は動作・行為の実現が可能であることを前提として、その実現に心理的な抵抗感があることを表す（館谷笑子 2000）。

難易文では、次のような表現もある。

- ・ひとすぢに憂きになしても頼まれず変はるにやすき人の心は（続後撰 868）

難易文の対象は、現代語の「字 {が／を} 読みにくい」と同様に、主格と目的格とがある。

- ・ a 隔て果てにし昔のことの忘れがたければ（建礼門院右京大夫集・詞書）
- ・ b 老いの涙をとどめがたければ（重之子僧集・詞書）

程度を表す形容詞も、動詞の連用形に直接付くことがある。

- ・ 故左馬頭殿（＝義朝）を幼き目にもよき男かなと見奉りしが、[アナタ（義経）ハ] 似悪くこそおはすれども、その御子かとも覚ゆる。（平治）

同頁「10.1.14 共感覚表現」は、新設の「修辭」の章に移す（「第 23 章 修辭（新設）>23.1 カテゴリー変容>23.1.4 異類結合>23.1.4.3 共感覚表現」）。

285 頁「10.2 連用修飾」。形容詞連用形ウ音便で中止法になる例をあげる。

- ・ [常陸介ハ] 琴笛の道は遠う、弓をなむいとよく引きける。（源・東屋）

次例は「寒い状態で」の意であろう。

- ・ 露結ぶ秋果てがたのきりぎりす草の根ごとに寒くこそ鳴け（元真集）

286 頁「10.2.1 評価誘導」。次例の「悲しくて」は、「悲しいことに」の意だろうか。

- ・ 故少弐のいと情けび、きらきらしくものし給ひしを、いかでかあひ語らひ申さむと思ひ給へしかども、さる心ざしをも見せ聞こえず侍りしほどに、いと悲しくて、隠れ給ひにしを（源・玉鬘）

288 頁「10.2.2 判断内容を表す連用修飾」。用例 (1) (1b)、(2) (2b) のような対の例を補っておく。

- ・ [源氏ハ紫上ヲ] いとらうたく思ひ聞こえ給へり。（源・紅葉賀）

- b 御手つきいとうつくしければ、[源氏ハ紫上ヲ] らうたしと思して (源・紅葉賀)
- ・しばしのほどに心を尽くして [夕顔ガ] あはれに思ほえしを (源・夕顔)
- b などさしも心にしみて [夕顔ガ] あはれとおぼえ給ひけん。(源・夕顔)

289 頁用例(11)～(14)の類例をあげる。

- ・「かの翁が面<sup>つら</sup>にある瘤<sup>こぶ</sup>をや取るべき。瘤は福の物なれば、それをや惜しみ思ふらん」と言ふに (宇治 1-3)
- ・人参りて、「京の方より火の多く見え候ふ」と申しければ、あやしみ思へるに、「よく見よ」と仰せられけるほどに (愚管抄)
- ・いにしへの好きは (=昔ノ好色ハ)、思ひやり少なきほどの (=分別ノ少ナイ若イ頃ノ)  
あやまちに (=過チナリト) 仏神も許し給ひけむ。(源・薄雲)
- ・[法師ハ] 人には木<sup>はし</sup>の端<sup>はし</sup>のやうに (=木ノ端ノヤウナリト) 思はるるよ。(徒然 1)
- ・今一方<sup>ひとかた</sup> (=軒端<sup>ぬし</sup>萩) は、主強くなる (=夫ガ決マル) とも、変はらずうちとけぬべく見えしさまさを頼みて (源・夕顔)

用例(12)は、初刷・第2刷で「(=悲シト)」となっていたものを、第3刷で「(=悲シイト)」に改めた。

用例(13)のように、「連用形+思ふ」で「…むと思ふ」の意になることがある。

- ・はかばかしい後ろ見思ふ (=後ロ見ムト思フ) 人なきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひ給へながら (源・桐壺)
- ・[夕霧ヲ] かく幼きほどより見馴らして、後ろ見思せと [源氏ガ花散里ニ] 聞こえ給へば (源・少女)
- ・「昔、[アナタガ] 世づかぬほどを扱ひ思ひし (=扱ハムト思ヒシ) さま、…」など [源氏ガ紫上ニ] 聞こえ給ふ。(源・若菜下)
- ・娘どもも男子どもも、所につけたるよすがども出で来て、住みつきにたり。[玉鬘ノ乳母ハ] 心の中<sup>うち</sup>にこそ急ぎ思へど (=急ガムト思ヘド)、京のことはいや遠ざかるやうに隔たり行く。(源・玉鬘)

次例は、「山深くあらん (=出家シテ山深ク住マム) と」の意である。

- ・山深く心の中に契りても変はらで見つる秋の夜の月 (続拾遺 607)

また、次例は「やむごとなくせよ (=大事ニスルヨウニ) と」の意である。

- ・院のいとやむごとなく聞こえつけ給へれば (源・若菜下)

[引用文献追加] 舘谷<sup>たまたにえみこ</sup>笑子 (2000) 「複合形容詞「一ガタシ」「一ニクシ」」『国語語彙史の研究』 19